

第2回 パラスポーツの振興と
バリアフリー推進に向けた懇談会

—議事録—

日時：令和4年12月20日(火) 14時00分～14時50分

場所：東京都庁第一本庁舎7階大会議室

【古川理事】

定刻となりましたので、第2回パラスポーツの振興とバリアフリー推進に向けた懇談会を開会いたします。

開会にあたりまして、座長の小池知事よりご挨拶を申し上げます。知事よろしくお願いたします。

【小池知事】

皆様、こんにちは。

今日はお忙しいところ、また今年も詰まってまいりました。そういう時期にお越しいただきまして、またお集まりいただきまして誠にありがとうございます。東京都知事小池でございます。座らせていただきます。

さて、今年は東京2020パラリンピック大会1周年記念ということで、様々な事業を展開いたしました。そして関連イベント、また皆様方にもご協力賜りましてありがとうございます。

そしてパラ応援大使の皆様方、このいくつかの事業での盛り上げ、魅力の発信など、多大なるご協力いただいております。東京都は誰もがパラスポーツを楽しみ、そして観戦をし、交流する、そのための取組を様々推進してまいりました。

来年の3月なんですけど、もうまもなく次の年になりますけれども、競技力の向上ができるその拠点ともなります、東京都パラスポーツトレーニングセンターが味の素スタジアムの中にオープンすることにいたしております。

また、2025年には、デフリンピックを東京で開催をすることが決定いたしました。関係者の皆様方と連携しまして大会の成功に向けて取り組んでまいります。

そしてバリアフリーでございますけれども、2020大会を契機として、皆様のご協力をいただきながら、様々な分野でこのバリアフリーが進んできております。公共交通・道路、こういったハード面だけではございませんで、心のバリアフリーなどのソフト面、両面での取組を一層加速させて参りたい。これがまさしくレガシーだと、このように思います。

障害の有無に関わらず、互いに尊重し合える共生社会の実現に向けましては、社会全体の気運醸成が不可欠でございます。2020大会、難しい中で開催をいたしましたけれども、ハード面・ソフト面、必ずこのレガシーを定着させていくのがこれからの責任だろうと思っております。

どうぞ皆様方には、社会全体の気運醸成に引き続き、ご協力を賜りますようよろしくお願いを申し上げて、冒頭の挨拶とさせていただきます。名誉顧問谷垣先生には、本日ご参加いただいておりますこと、改めて感謝申し上げます。ありがとうございます。

【古川理事】

ありがとうございました。続きまして、名誉顧問の谷垣禎一様からご挨拶を頂戴

いたします。谷垣様、よろしくお願ひいたします。

【谷垣禎一様】

いろいろな困難や、それから問題もあったパラリンピックですけど、終わって1年余りになりました。私も、いまだにあのときの大会の、いろいろなアスリートの方の表情とかパフォーマンスをよく思い出します。それで一つ一つのそういう彼らのパフォーマンスも本当に素晴らしかったなと思いますけど、1年余りたって今考えますとですね、私自身がこの障害を負ってから、「俺は何をしていこうかな」ということが、もういつも頭の中にあるんですが、ああいうパラアスリートの方たちが「私たち、俺たちはこのスポーツが好きなんだ」って、その怪我をしてようと障害があろうと、そういう想いで突き進んでこられたのは、パラリンピックだったと思うんですね。それでやっぱりそういう障害を持った者が自発的に「俺はこれをやりたいんだ」って考えること、これがやっぱり一番パラリンピックを経験して、生かしていかなきゃならないことだということを、今、感じております。あれだけの盛り上がりがありましたから、あれであとポジションと潰れてしまうのは、いかにも惜しい。そうすると何をやらなきゃならないか。これは健常者のスポーツもそうですけれど、やっぱりパラアスリートたちが、いろんなその競技に取り組んでいかれる、その環境というか仕組みをつくらなきゃならないのは、これも大変なことですけども、もちろんだと思います。

しかし、もう一つ大事なのは、障害を抱えたパラアスリートたちが、「私はこれをしたかった」って、「こういうことが好きなんだ」っていうことを表明できること、そしてそれを実践していくこと。これが一番大事なことで、バリアフリーっていうのも、根本はそこにあるんじゃないかなというふうに私は感じております。

ですから、この懇談会はそういうことをバックアップするのが目標ですけども、微力ながら私も皆さんとご一緒に一歩進められればなと、こう思ってる次第です。どうかよろしくお願ひいたします。

【古川理事】

ありがとうございました。

続きまして、東京大会後の取組につきまして、私の方から3点ご報告をさせていただきます。画面の方をご覧いただきたいと思います。

まず、報告事項の1点目。パラリンピック1周年記念事業の実施についてでございます。8月24日にパラリンピック1周年記念イベントを有明アリーナで開催し、記念セレモニーの他、車いすバスケットボールのエキシビジョンマッチを行い、多くの皆様にご観覧いただきました。また聴覚障害者への情報保障や、DXを活用した参加機会の確保など、バリアフリー等の取組を推進してまいりました。

次に、報告事項の2点目。東京2020大会を契機としたバリアフリー化の進捗でございます。まず、公共交通につきましては、鉄道駅においてエレベーター設置等に

よる1ルート確保や、ホームドアの整備等を進めてまいりました。また、ノンステップバス、UD タクシーの普及を促進しております。

次に、道路・公園についてでございます。都道のバリアフリー化、無電柱化を進めるとともに、誰もが快適に利用できる公園の整備等を行ってまいりました。

続きまして、建築物整備等につきましては、ユニバーサルデザインの視点に立った競技会場整備を進めますとともに、宿泊施設の車いす利用者用客室や共用部のバリアフリー化を促進してまいりました。

最後に、ソフト面におきましても、障害の有無に関わらず、互いに尊重し合える共生社会の実現を目指し、心のバリアフリー、情報のバリアフリーの取組を推進してまいりました。

次に報告事項の3点目、パラ応援大使活動報告です。まず、谷垣名誉顧問はじめ、大使の皆様には、機を捉えた応援メッセージの発信等、様々な取組に多大なるご協力をいただきました。1周年記念イベントの観覧等を通じまして、大使同士の交流の活性化にも繋げていただきました。

次に、関連イベントに、こちら表にしておりますけれども、多数ご出席をいただきますとともに、パラスポーツの振興とバリアフリーの推進に寄与していただきました。

最後に先月には、東京都人権プラザの視察を実施いたしました。

この視察の様子が動画にございますので、ご覧いただきたいと思っております。

～動画～

【古川理事】

映像は以上でございます。

最後にですね、今後についてでございます。来年も東京で様々なパラスポーツの国際大会が予定されております。また、2024年にはパリでのパラリンピック競技大会、さらに2025年には、デフリンピック大会が日本で初めて開催となります。

また、バリアフリーの推進につきましても、引き続きユニバーサルデザインのまち作りを展開してまいります。

東京大会後の取組についての報告は以上となります。

続きまして、意見交換の方に移らせていただきます。

今回、意見交換に先立ちましてですね、大使の皆様には、事前にアンケートを実施させていただきました。モニターに表示しております3点についてでございますけれども、本日欠席の方もいらっしゃいますので、主なものについてだけ、私の方からちょっとご紹介をさせていただきたいと思っております。

まず1点目の、パラ開催後が変わったことといたしましては、パラスポーツの認知度が向上した。様々なイベントや体験会の機会が増えたなどのご意見をいただい

ております。

続きまして2点目。パラスポーツやバリアフリーを根付かせるために必要なことといたしましては、イベントの定期的な開催や発信の継続、常設体験の場の設置などについてご意見をいただいております。また、バリアフリーの推進について、一人一人の意識や行動に関するご回答もございました。

続きまして3点目。大使ご自身でやりたい活動やアイデアにつきましては、大使同士の対談や、ボッチャ大会への参画、アート・音楽・食など、様々な分野での取組を挙げていただきました。また、パラスポーツやバリアフリーへの関心を拡大するため、出前授業の機会の拡大や、全国各地でのイベントの開催、アスリートの日常に興味を持ってもらえるような発信をするなどのアイデアを頂戴しております。

その他、いただきました意見につきましては、お手元のタブレットの中で一覧にしておりますので、適宜ご確認いただければと思います。

それでは、皆様のご意見を聞かせていただければと存じます。これから順番にご指名いたしますので、「パラスポーツやバリアフリーを根付かせていくために」というテーマですね、ご発言の方をいただければと思います。

まず三浦様、お願いいたします。

【三浦 浩様】

三浦です。

自分の場合、パラリンピックが終わってから小中学校の講演会行ったときに、パラスポーツというよりも、やっぱり人権教育の問題が取り上げられてて。その中でやっぱり車いすに乗っていただいて介助する体験、また乗ってもらって介助される体験。その中に、あとそのチームで作ってボッチャをやって一緒に戦って。でも、お互いライバルというよりも、お互いどうやって戦略を練って戦って、その後、勝ち負けではなく、喜びに変えるという、そういう授業を今、ちょっと自分がやっているんですけども、そういう流れをもう少し何か小中学校で僕ら大使が何かできると、もう少し長い目で見ると、何か教育的にも良くなるんじゃないかなと思っております。以上です。

【古川理事】

ありがとうございました。続きまして、川内様、よろしくお願いいたします。

【川内 美彦様】

はい、東洋大学の川内です。

私はバリアフリー分野なので、そっちの方のお話をしたいと思いますけども。東京大会を契機に、ハードの整備がずいぶん進んだんですね。例えば駅のエレベーターの設置状況なんかというのは世界の大都市の中でトップだというふうに言われて

いる。それからノンステップバスも、ほぼ都内では100%になっているというふう
に、すごく進んだんですけれども。

一方で一人で移動できるようにする環境という思想はまだ十分に行き渡っていな
い。2025年のデフリンピックに私は期待しているのは、今度は情報提供、情報保障
の充実ということがすごく重要になってくるので、それによって、2020のハードの
整備の進歩と、それから、2025の情報進歩、情報提供の進歩というのが、並んで
いくかなというふうに期待しています。

【古川理事】

ありがとうございます。続きまして花岡様、よろしくお願いいたします。

【花岡 伸和様】

花岡です。

昨年パラリンピックが開催され、1年余りというところなんですけれども。その
間、私もいろんな取組に参加してきましたけれども、感じているのは、スタートし
て少し進んだぐらいのかなというふうに感じています。やはり大会前から「レガ
シーというものは、作らなければ何も残らない」ということはよく言われてきま
したけれども、やはりそのレガシーを残していった評価できるっていう、そのスパン
はおそらく50年や100年、簡単にかかってしまうんじゃないかなというふうなこ
とを感じています。

まずはやはり今現在行われていることをどこまで継続させられるかっていうと
ころが非常に大事ななと思っております。その中で障害のない人たちへのアプロ
ーチとしては、やはり先ほど三浦さんもおっしゃってましたけど、子供たちへのアプ
ローチ、私、非常に大事にしております。

僕の場合は車いすをおもちゃにして遊んでもらうってということが非常によくやる
んですけれども、大変盛り上がるのはいいんですけれども、盛り上がった後に「み
んな車いすっておもちゃにしてよかったっけ？」って尋ねると、ハッと、我に返っ
たようになるんですね。「そうだ、体の不自由な人のもので遊んではいけない
んだ」というような反応を子供たちが示すんです。実際に口にもします。なぜそ
んな考えを持つようになったかというのは、おそらく大人から受け継いだものだ
と思うんですけれども、いわゆるアンコンシャス・バイアス、無意識の偏見に繋が
っているのではないかなというふうに思っております。一日僕が行っただけで大き
く変わるといのは難しいなということも同時に感じていますので、やはりそこも
継続していくことが大事だと思っております。継続していった50年100年先
って見たときには、我々と同じようなことをやれる障害のある人たちって
いうその存在を作っていくしかないのかなというふうにも思いますので、障
害のある人たちへのアプローチとしては、スポーツに親しんでいくところから、
社会的なアクションを起こ

せる人材を、リーダーを育てる、そういったところまで進めてまいりたいなというふうに感じております。以上になります。

【古川理事】

ありがとうございました。続きまして二條様、よろしくお願いいたします。

【二條 実穂様】

二條です。

設備面では、2020 大会を機に、大変整ったなど身近なところでも実感しております。私の職場の最寄りの駅は、これまで階段昇降機しかありませんでした。利用する場合には駅員さんをお願いをして利用させていただいていたのですが、やはりお忙しそうにされている駅員さんに声をかけて利用させてもらうということに心苦しい部分もありました。その駅にも、エレベーターが付きまして。エレベーターがついたことで、自分自身の力で移動することができるようになったことで車いすユーザーだけではなく、ご高齢の方やベビーカーの方、障害のあるなしに関わらず皆さんが、自分自身の力で活動の場・行動の幅を広げていくことができるようになったのではないかなと思います。

先ほど知事がおっしゃっていた通り設備面だけではなく、今後は心の部分のバリアフリーを進めていくことが必要になってくると思います。そうすることによって、さらにバリアフリーが、ハードとソフト両方揃うことで、障害の有無に関わらず全ての人たちが過ごしやすいまちになるのではないかなと思っております。以上です。

【古川理事】

ありがとうございました。続きまして野村様、よろしくお願いいたします。

【野村 祐介様】

野村と申します。

私は 2020 年のパラリンピックまたは開会式での片翼の天使の演出などを通して、すごく心のバリアフリー、ソフト・ハードの両面でのムーブメントというか流行の火付けができたのはあるのかなというふうに思います。

ただこれは食文化とか音楽が何でもそうだと思うんですが、その流行をその文化に落とし込むという作業をしない限りは、継続してそういった意識が芽生えるのが難しいと思っております。そのためにではどうするかというところで、これは食文化をやるときもそうだとは思うのですが、分かりやすいそのガイドラインを作ったりですとか、そういう情報の整備ですとか、あとは細部にわたる作り込み、クオリティという部分の必要性がすごく重要になってくると思います。そしてそれを行った上での、皆様もおっしゃっておりますが、幼少期の体験ですとか、いわゆるエク

スペリエンスを通しての自分の気づきっていったものを自分のプライドに変換することによって、こういったバリアフリーの意識というのを根付かせていけないかなと思います。

【古川理事】

ありがとうございました。続きまして、高橋様、よろしく願いいたします。

【高橋 儀平様】

はい、東洋大学の高橋です。

私は東京都の福祉のまちづくり推進協議会に参加させていただいている立場から、都市のバリアフリーについて一言だけお話させてください。

やはりバリアフリーの都市を推進する重要施策の一つに、バリアフリー基本構想という法律で決められているものがあります。これは東京都の場合ですと半数以上の区市が策定しているのですけれども、その中に、教育啓発特定事業っていうのがあるんですね。先ほどもお話がありましたけれども、やはり地域のバリアフリー化を推進するためには教育が非常に重要になってくるというふうに認識しています。この会議のバリアフリーもそうですし、あるいは先ほど来ありますように心のバリアフリーですとか、そういったようなテーマですね。学校のバリアフリー、教育機関のバリアフリー、そして地域全体のバリアフリー、その出発点が教育のところにあるのではないかというふうに思います。

ぜひこれからもパラスポーツも含めてですね、一体的なバリアフリー化を推進していく。そのために少しでも力になればというふうに思っています。どうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。

【古川理事】

ありがとうございました。続きまして、葭原様、お願いいたします。

【葭原 滋男様】

はい、葭原です。

私はですね、最近体験したイベントの二つからご紹介したいと思います。先日ですね、11月ですけれど、レインボーブリッジを封鎖して自転車のイベントがありました。こちらに参加させていただいたのですけれども、やはりサイクリングって楽しいな、気持ちいいなっていうのをすごく感じました。

しかしながらですね、私、自転車競技を離れてからですね、サイクリングをする機会がどんどん減ってしまっています。それは視覚障害ということでタンデムサイクリングを使わないといけないんですけれども、そのタンデムサイクルの自転車がですね、都内、走ることが一般公道を走行することが今現在認められていないと。全国でも今、東京と神奈川だけが認められていなくて、他の道府県が認めていると

というのが現状です。そういう中で、やっぱりそのパラリンピックを目指すようなアスリートってというのはなかなか育っていかないだろうなと感じています。

また、自分もこうやってタンデムサイクリングを競技としてやってきた人間としてはですね、やはり競技を離れても普段から、サイクリングを楽しみたい、そういう気持ちは強く持っています。またサイクリングもしたいし、家族でサイクリングしたいと。買い物にも行きたいと。それができない、っていうのが現実だと思っています。ぜひですね、東京都内でもタンデム自転車を走行できるようにすることって、必要だと思っています。

その一つの提案としては、先日みたいに、毎月1回、都内の例えば山手線沿内、そういうところで車両の通行を禁止して、この時間帯はサイクリングタイムである、タンデムサイクリングタイムだよ、そんな時間を設けていただけると私たちも自転車に乗れるし、高齢者もですね、前に若い人を乗っければ、楽しくサイクリングができると、そういう時間を設けてもいいのかなと思っています。

もう一つは、こちらアンケートには書いてないのですが、港区内の小学校です、ブラインドサッカーの大会を開催しました。これを、小学校の子供たちが主催して、企画から運営から子供たちがやって、視覚障害の選手たちを招いてそこで試合をやると。その中で、子供たちは主催することの喜び、あるいは、ブラインドサッカーを見ることによってパラスポーツの素晴らしさ、また障害者に対してどういふ配慮すべきなのか、そういうところを、学校の教育の中で学んできたのかなと思っています。

こういう機会って、非常に素晴らしいと思いますので、こういう機会をどんどん増やしていくこと、必要ではないかなと思っています。以上です。

【古川理事】

ありがとうございました。続きまして根木様、お願いいたします。

【根木 慎志様】

はい皆さんこんにちは、根木です。

こうして皆さんと久しぶりに顔を合わせてお会いできるの、もうこれだけでも、昨日からずっとワクワクしていました。

本題に行きますが、本当にパラスポーツやバリアフリーを根付かせるというための意見交換ってことなんですけれども、まさしく谷垣名誉顧問も言われていたように、今日は大会に出場された皆さんといいますか、他のアスリートたちが、競技を通じて人間の可能性であったりとかそういうものを本当に存分に表現してくれて、国民、世界中の人たちが、本当に人間の可能性ということを知れ、自分事として色々なことを感じる事ができた、大成功したパラリンピックだと思います。

今後僕もそのいろんな活動をさせていただいているのですけれども、今まではもちろん、大会に向けてだったので競技中心に見てもらって。アスリートたちがその

舞台上で色々なことを伝えてもらいました。いよいよそのこれからはまさしく、この僕たちの、この会のメンバーの一番の意義だと思うんですけども、バリアフリーという言葉って、なんか一瞬、障害者の人たちの生活がより何かしやすくするためのものというふうに考えてそうで、それももちろんあると思うんですけど。僕は心のバリアフリーというとまた全然感じが変わってくると思うんですけども、そもそも今日も講演で言っていたのですけれど、「エレベーターがあってスロープがあって車いすトイレがあって点字ブロックがあったら実は障害者と言われる人たちの障害はないよね。」って言うと、これ別に障害者だけの話ではなくて、みんながそれぞれの違いを認めることによって、実はみんなが素敵に生きていけるっていう。これこそ、バリアフリーという言葉なのかなというふうに考えると、ここにいる皆さんもそれぞれに色々な違いがあって困りごととか楽しみごとも、みんな違うわけで。それを私達の会はパラスポーツという言葉を使ったり、バリアフリーという言葉を使って、それぞれが違う意味で見て素敵に輝けるんだっていうことを、よりこれから伝えていくことが必要なのかなというふうに思います。

まさしく周年イベントでは、和合由依さん、都知事も一緒に、エンディングでは、開会式で車いすの片翼の少女というタイトルで、車いすに乗った都内の在住、中学3年生かな今は、由依さんが片方の翼でダンスをするっていう、皆さんも記憶に新しいと思うんですけども、彼女は片方の翼で片方しかないから飛べないと思っていたんですよね。でも彼女の夢は、大空に飛びたい、はばたきたいという夢がある。空を飛んでみたい、でも翼が片方しかないから飛べないっていう、その喜怒哀楽を表現していて、最後は勇気を持って飛び立つっていうのを、みんな感動しましたよね。

実は飛んでみると、空には自分みたいに片翼の翼があったり、大きい大きい翼があったり小さな翼があったりとか、実は世界にはいろんなそれぞれの違いでみんなが輝いているということを表現しました。まさしく多様性ですよ。その彼女の後のインタビューを聞いたらすごいなと思ったのが、その翼って何できているかという、実は個人の頑張りもあるけれども、みんなの応援であったりとか、違いを認めるということで、要は翼が出来上がっているんだっていうこと。

まずは、アスリートはまさしく、みなさんはじめ、パラアスリートは競技を通じてみんなの翼を見せたと思うし、それを見た、感動したみんなも、それぞれにまず素敵な翼を持っているんだと。でも時には色々なハード面、色々なものがあったその翼が輝けない場合もあるけれども、みんなが認めることによって、お互いの翼が輝ける存在であるっていうことだったのかなと思います。

周年イベントでは有明で、車いすバスケットボールが惜しくも銀メダルを取ったあの場所で、日本代表のエキシビジョンマッチの前に、車いすに乗った車いすのキッズたちのエキシビジョンマッチ、僕も一緒に参加させてもらったんですけど、まさしくあの子供たちが、車いすユーザーの子供たちが有明アリーナで輝いていたんですよね。それを都内の小中学生がみんなですべて応援する。とても素敵な、まさしく

これからの世の中を象徴するものがあったと思うので、これからいろんな場面で先ほど野村さんが言われたように、このバリアフリーという意味を実際次に文化として根付かせるということ私達、皆さん、パラ応援大使の皆さんと色々な方法を使って広めていけたらな、根付かせていけたらなというふうに思います。ありがとうございます。

【古川理事】

ありがとうございました。続きましてテリー様お願いいたします。

【テリー伊藤様】

テリー伊藤です、よろしく申し上げます。

12月11日ブラジルのリオで、ボッチャの世界選手権がありまして。それで日本の内田選手がですね、初めて金メダルを取りました。その映像をNHKで流しておまして、その後ですね、インタビュー流したんですよ。競技中と全く違う、いい感じだったんですよ。おお、いい感じだ内田選手。短かったです。30秒ぐらいで終わってしまっ。もっと知りたかったのになあと思ったんですけども。なかなか、競技の選手の人柄ってのは分かりにくい。僕その時思ったんですけども、あ、スポーツってスポーツから入る方法もあるけれども、その人、人物の人柄、そこから入った方がパラスポーツで理解されるんじゃないかなと。

先ほども根木さんと三浦さんと会って、最初に話すのは、車の話なんですよ。

「何乗ってんの？」と。それがものすごく盛り上がるんですよ、最初からパラスポーツの話から入るわけじゃないんですよ。そしてこれがものすごく大切なことで、パラスポーツを理解してくれというところから入ると、これSDGsと一緒になかなか敷居が高いという現状があると思うんですよ。

そこで大事なのは、パラスポーツやっている人たち僕も何人かいるんですけど、「この人たちは面白いなあ。こんなことで悩んでいるんだ。こんな恋の悩みがあるんだ。」とか、「こんなことで、1年経って、いやいやなかなか仕事ないんだよな。」とかっていう、普通に愚痴っていますよ。それがいいんです。普通の僕らが悩むことと同じことで悩んでいる。そういうことがもっともっと理解される。それが伝わると、本当に今度は、人間を好きになってパラスポーツを理解していくというふうな形で。今どうしてもパラスポーツから入っていくから、どうしても敷居が高くなるっていう。そこを感じたんですよ。

ですから皆さんの声を常に聞けるような、そういう場所ということで私も前から提案しているんですけども。パラスポーツ選手だけで、もう根木さんなんかペラペラ喋るし、上手いから、今度は根木さん自身もYouTube始めたんですけども。皆さんで番組を作って、皆さんが「今日何食べた?」、例えば目に障害があるのだったら、「どうやって料理食べるの。ナイフとフォークどうするんだ。」とか、そういうのすごく面白いんですよ、聞いていて。それでおかしくなくて。僕なんかも

一緒に食べて、「もっと右だよ、右だよ。ケーキ食べれないよ。」とかって普通に言うんですね。そういうことだと、そういうことなのか、だから、そういうことが、建前とは違うことになっていくと思う。

これは実は、ものすごく海外なんかでも本音でどんどんどん、ロンドンのパラアスリートなんかとも話したことがあるんですけど、「いやそんなことない、日本はちょっと硬すぎるよね。」ってふうに言ってたんで、ぜひそういう形でラジオ番組みたいなものを持ってですね。皆さんで話面白いから。ハッピーな話もしてほしいと思うし、ぜひね、そういうことでやってもらえると、今度また新しく、味の素スタジアムでそういうのができるんだったらそこから中継してもいいし、そういう楽しい部分と熱い部分とドキドキの部分とか、苦しむ部分をやっていくことによってもっと一体化するし、何かスターも生まれるんじゃないかなというふうに思いました。ありがとうございました。

【古川理事】

ありがとうございました。続きまして、リモート参加の小谷様、よろしくお願ひいたします。

【小谷 実可子様】

こんにちは、小谷実可子です。

今日はリモート参加ということで失礼しております。先ほどまで、辰巳国際水泳場の水の中におりました。ふと気がつくと、同じレーンで泳いでいる方は片腕のないパラスイマーでした。でも本当に、みんなが泳いでいる輪の中に入って、同じようにみんなではあはあ言いながら泳いでいる姿に、これが東京パラリンピックの効果の一つでもあるんだなど。もちろんそのパラスイマーの方が一般公開しているプールに当たり前のよういらして泳いでいるっていうこともそうですけれども、それを水中で気がついた自分も、多分以前だったら、ドキドキして、私、隣で泳いでいて邪魔じゃないかなとか、いいのかなとか、どう接したらいいかなってすごくドキドキしたと思うんですけども。やはり東京パラリンピックを通して、たくさんパラリンピアン、パラアスリートたちに出会ったことで、自分も、何でしょう、見慣れたというか。特殊な別世界の人たちじゃないんだっていうことが、肌感覚として分かるようになったことを実感し、すごく嬉しく思いました。

東京パラリンピックに向けて、東京都の支援で、パラアスリートが学校訪問を頻繁にしていたと思うのですが、私の娘の学校にも来まして。やはり子供たちは、最初は緊張するし、どう接していいかわからないし、怖いけれども、一緒にスポーツをやってみたり、それこそ一緒に給食を食べてみて、今テリーさんがおっしゃったように、こんなふうに食事をとるんだっていうことを近くで知ってですね、そして感じて、そしてお友達になって、「それ大変じゃないの。それ手で食べたら熱くないの？」と普通に会話をすることで、その日のパラアスリートの訪問の後は、子供

たちにとって、その障害のある方々が、やっぱ身近に感じられるようになっているようなんですね。

こういう体験の積み重ねってというのが、すごく大切なのではないかなと思いました。ぜひこういうパラアスリートの学校訪問というものを、より頻繁にこれからも続けていただきたいなと思いました。

1つ提案といいますかアンケートにも書かせていただいたんですけども、私 JOC の方でも常務理事を務めさせていただいておまして、JOC はプライドハウス東京と、包括連携協定を結んだこともあって、色々なアクションを一緒に進めているんですけども。アライアスリート研修会っていうのがありまして、要するに LGBTQ の人たちが、より自然に自分たちのそのマイノリティについてオープンにできたりで、みんなに理解してもらっている中の方が、やはりパフォーマンスが上がるっていうデータがあるようなんですけども。そういう部分で、しっかりと当事者の人たちの話を聞く、苦勞を聞く、こんなふうに接してもらおうと嬉しい、こういう言葉とかこういう見方は逆に傷つく、発信をするためにはこういうことに気をつけてどんどん発信すればいい、などなどのレクチャーを3回ぐらい受けることで、アライアスリートとしての認定証をもらえるんですね。そのような形で障害者に対しての接し方とか、そういうものも、もっと気軽に勉強できるようになって、何かそのパラアスリートサポーターじゃないですけども、資格みたいなものが取れたりすると、また輪が広がるのかななんていうことを思いました。

そして最後に、今日ご報告いただいた中に、ユニバーサルデザインタクシーの普及についても、本当に平成28年は3台だったのが、1万台を超えるユニバーサルデザインのタクシーが普及したということで、本当に素晴らしいなと思ったんですけども。人の部分でいうと、私、スポーツディレクターとして東京パラリンピックの期間中もずっと現場を見せていただいたんですけども。運転手の方々が、最初は車いすの方々の乗せ方もすごく時間がかかったり、このスロープの降ろし方もどこに鍵を挿していいかわからないし、すごく時間がかかっていたんですね。それがもう日に日に、バスに乗るときは自力で階段に乗れる、上がれる人はこっち、介助がないと上がれない人はこっち。椅子に乗りうつれる人はこういう順番っていう、なんていうのでしょうか、ノウハウというのをどんどん身につけていって。大勢のパラアスリートがバスに乗るためにかかる時間が、どんどん短くなっていったのを目の当たりにし、こういうドライバーさん達というのは、全国からボランティアで集まってきた方々だったので、今、多分全国に広がって、それぞれの地元でユニバーサルデザインのタクシーを使って、きっと障害のある方々をよりスムーズにサポートしているんだなということ非常に、想像しながら、嬉しく思いました。ぜひこういう特別な機会を持った方々に、その経験を生かしていただきながら、みんなで誰もが過ごしやすい社会のために、お手伝いをしていきたいと思っております。私からは以上です。ありがとうございました。

【古川理事】

ありがとうございました。続きまして、リモート参加のイルカ様、よろしく願
いいたします。

【イルカ様】

はい、皆さんこんにちはイルカと申します。

ずっと皆様のご意見を伺ってましてですね、もう本当にうなづくことばかりで大
変嬉しく聞かせていただきました。やはり物事は何でもですね、私はお互いを知る
ということから始まるんじゃないかなってすごく思っていたものですから、やはり
テリーさんのおっしゃる人柄っていうのは、まさにそうですね。人柄を知ると余計
そのスポーツにぐーっと気持ちが入っていくんですよね。そういうところだなと思
ってしまして。ですから東京パラリンピックが終わった後に、非常にパラアスリー
トの皆様が色々なところに登場される機会が増えたというのは素晴らしいことだ
と思います。コメンテーターであったりとか、それからCMであったりとか、いろん
な形だと思うんですけど、そういうことで私達は「そうか、そうか」ってことがど
んどんどんどん増えていく。そういうことが、いかに大切なのかっていうことを、
非常に私だけでなく、皆さんが実感されているんじゃないかなと思います。

私自身もですね、うちの父が今車いすなものですから、出かけるときに色々な体
験をさせていただき。この間もちょっと空港に行きましたときにですね、ちゃんと
車いす用の大きなトイレはあるんですけども、一般用のトイレとちょっと離れた
ところにあるんですね。行きましたら前の方がちょっと時間がかかったので、結
構、飛行機の時間が大丈夫かなっていう感じになりました。その数がもうちょっと
増えればとも思いましたけれども。あともう一つは、一般の方たちのところと、そ
この車いす用のところがかなり距離が離れているので、介助している私もやっぱり
行きたいんですけどね、っていうようなときには非常に時間がかかってしまうとい
うこともあったりして。これやっぱり実際自分が使ってみないと、こうやって体験
してみないと分からないことが、いっぱいあるんだっていうことを貴重な体験さ
せていただき。ですからやはり非常に当事者でなくては分からないことが、まだま
だもう本当にいっぱいあるんだろうなっていうことを思いました。そういうことを
感じますとですね、非常にこれからまだまだいろんな皆様にご意見は取り上げてい
ただきたいと思うんですけど。

私はいつも、先ほど野村さんからもありましたけれども、食に関しての話をいつ
もさせていただくんですけども、今回のアンケートにもですね、私は食に関して
日本は豊かだが多様性には貧しい、ということを書かせていただきました。やはり
いろんなところへ行きましても、海外からだんだんもう今たくさん皆さんの皆さんがいら
してますけれども、やはり宗教的な問題、それからアレルギーの問題、いろいろ抱
えていらっしゃる方たくさんいらして、日本語だけで書かれていて分からないし、
日本食は大丈夫かなと思っても、ダシにお魚が使われていたりとか、いろんなもの

が入っていたり。そういうものは聞いても、言葉ではなかなか店員さんが説明できなかったりということもあるので、いつもお願いしているのは、外食産業の皆様には一種類、一種類だけでもいいので野菜だけとか、何々だけとかっていうものをですね、少しずつ増やしていただけたら、もっともっと皆様が安心して外出できる形にもなるかなと思います。

色々な形で、これからアレルギーを持っている方たちもたくさん増えると思いますので、みんなが一緒の同じテーブルで楽しく食事ができたらいいなというふうに思いますと、この間行きましたレストランに、こういうアレルギーがありますという表をいただきまして、そういうものもだんだん整ってきているんだなというふうに思いますと、やはりこういう小さな意見もですね、取り上げていただくってところから一歩ずつ一歩ずつ進んでいただけたら、もっともっとみんなが暮らしやすくなるんだなということも色々と感じさせていただきました。

世界中の皆さんが、やはり困っていることも、幸せなことも、そして苦しみもいろんなことが同じなんだなことを共有してですね、もっともっとバリアフリーの世界になっていって、そして来年こそはもっともっと平和な地球になってほしいなというふうに思っております。

私も微力ながら、何か応援させていただけること大変嬉しく思っております。以上でございます。イルカでした。

【古川理事】

ありがとうございました。続きまして谷垣名誉顧問からも一言ご意見の方をお願いしたいと思います。

【谷垣 禎一様】

皆様からご意見をいただいて、本当にそうだなと。そういうことで、もう私からつけ加えることはないのですが、やはり先ほどテリーさんが人柄とおっしゃっていたり、やはり障害者と個別に知り合いになって、何を悩んでいるかっていうことが分からないと、漠然と障害者と、あるいはパラアスリートだと言っても、何が問題なのか分からないことがまだまだあると思うんですね。なので、できるだけそういう個別の接触で、理解を広げていくこともやらなきゃいけないなと思っています。よろしく願いいたします。

【古川理事】

ありがとうございました。それでは最後に座長の小池知事よりお願いいたします。

【小池知事】

ありがとうございます。アンケートにもお答えいただいたり、何かとお手数をか

けてはおりますけれども、でも皆さん本当に、このパラスポーツに対してですね、本当にまさしく応援団で、そしていろんな問題をそこから解決することによって、みんなにとってより住みやすい楽しい社会作りをというその思いが、お一人一人から感じられ、そのことがレガシー、東京都にとりましても、レガシーだなどつくづく思った次第でございます。

ハード面、ソフト面、いろいろこれからもより改善していくことは多々あるかと思っておりますけれども、しかしやはり、東京 2020 パラリンピック大会が大きな原動力になったことは確実でございます。

またあつという間に、もう来年は 23 年。次は 24 年。アスリートの皆さんはもうパリを見据えて、今も一生懸命練習しておられると思いますし、また葎原さんおっしゃいましたように、この間レインボーブリッジを自転車で行き抜けるという、まさしくレインボーブリッジを封鎖したところがございますが、あのときにタンデムで走っていただいたということ、普通にも走れるような形にしてほしいというご要望もございまして、とても具体的で、取り組んでみたいと思っております。これからも、この障害あるなしに関わらず、東京は住みやすい、楽しい、美味しいというふうに言われるように、これからも努めていくということ、今日は皆さんのお声、一人ひとりお聞きしながら、改めてそう思った次第でございます。本当にありがとうございました。また引き続き、応援団よろしくお願い申し上げます。ありがとうございます。

【古川理事】

それでは以上をもちまして、「第 2 回パラスポーツの振興とバリアフリー推進に向けた懇談会」を終了いたします。本日はどうもありがとうございました。